

自然の美的鑑賞における認知モデルの批判的検討

—〈制限的認知モデル〉の構築に向けて—

青田 麻未

序—問題設定の背景と本稿の概要

本稿は、環境美学において、我々が自然を美的に鑑賞するあり方を説明するモデルの一つとして確立されている「認知モデル(cognitive model)」について、批判的に検討するものである。認知モデルとは、〈適切な自然の美的鑑賞を行うためには、自然に関する知識が重要な役割を果たす〉と考える立場であり¹、20世紀後半に興った環境美学の誕生と展開の歴史的経緯そのものと密接に関係している。

環境美学は、美学内の、美学外的な要請を受けて成立した。第一に、美学内的には、19～20世紀の西洋美学がその対象を芸術に限る傾向にあったことに対して、自然の美学の復権が要請されたことである。第二に、美学外的には、1970年代以降特に顕著に叫ばれるようになった環境保護論と親和的な自然の美学の成立が要請された。環境美学は、忘れ去られた自然の美学を、よりその時代の文脈に沿うかたちで再度論じる必要性に基づいて誕生したのである。

この歴史的経緯からすれば、なぜ認知モデルが知識を重要視するのかということが理解される。まず、第一に美学内的に「自然を自然として」鑑賞するということの様相の解明が目指されたが、そのために知識が重要となる。たとえば、自然の美学の復権をいち早く唱えた論者の一人、ロナルド・ヘプバーンは、自然が鑑賞のための明確な枠組みを持たないゆえに、その美的鑑賞も否定的なものとして捉えられてきたと指摘した。しかし彼によれば、むしろこの特徴によって、自然は鑑賞者に対して想像力の遊戯の余地を残しており、美的鑑賞の対象として価値あるものとなる。ただし、彼は想像力が作用すればどのような鑑賞態度も許されるという立場へは至らない。ヘプバーンは、自然の美的鑑賞に

は「感覚的直接性(sensuous immediacy)」と「思想 - 要素(thought-component)」の二つの要素が含まれると考え、後者の「思想 - 要素」のひとつとして、科学的真実を挙げている。こうした事実の関与によって、美的鑑賞の真剣さが高まりうると彼は考えたのである。こうした論を受けて、認知モデルは「自然を自然として」、すなわち自然に関する事実を明らかにし、それに基づいた美的鑑賞を可能にするものとして、知識を重要視することとなった。

第二に、美学外的にあって、環境保護論³との関係からもまた知識が要請される。環境保護論との関係について考える際に特に重要となるのは、現代の環境倫理学の祖とも言えるアルド・レオポルドである⁴。レオポルドは、環境問題への対処が農学や工学といった個別的な分野ごとに論じられていた状況に対し、これらの学問分野を統合して考える必要があると主張した。この統合的な学問分野として捉えられるのが、生態学である。さらに彼は、生態学に関する知見を得ることは、自然の持つ美的質に気づくことにつながると考えた。そして、土地に対して美という価値を見いだすことは、土地との倫理的な関係を結ぶことにつながるとするのである⁵。つまり、生態学的な知見は、自然の美を見いだすことを助け、その美は我々が土地に対して倫理的な態度をとることを保証する。この知識と美と倫理の関係は、認知モデルにも影響を及ぼしている。要するに、認知モデルにおいて、知識は美的鑑賞と倫理的判断とを架橋する役割を担わされているのである。

このような影響によって、知識を重要視する認知モデルが形成された。これら二つの要請の結果として求められる知識は、美的鑑賞あるいは美的判断に対して、一定程度の客観性を保証するものとして働いていると考えられる。第一の美学内的な要請との関わりで言えば、自然環境を風景画のように鑑賞したり、想像力を自由に働かせて老木を老人のように鑑賞したりというような恣意的な鑑賞に対し、自然固有の事実に基づく美的鑑賞はより対象に即した、客観性の高い美的鑑賞と言えらるだろう。第二の美学外的な要請との関わりでは、客観的な美的鑑賞はより多くの人に受け入れられるため、倫理的判断の基盤となりうるということが言えると認知モデル論者は考えている⁶。

認知モデルの代表的な論者としては、アレン・カールソンが挙げられる。彼の認知モデルには、先に述べた知識が持つ役割が特に強く反映されている。そ

れゆえ彼のモデルは、ときに「科学的認知モデル(scientific cognitivism)」とも呼ばれる。彼が自然の美的鑑賞において必要とする知識とは、「常識的／科学的知識(commonsense／scientific knowledge)」である。さらに、彼自身は必要とされる知識の範囲を明確に示すことはしないが⁷、彼の論を精査すれば、知識の中でも重要な役割を担うものが生態学に関する知識であるということがわかる⁸。この傾向は、その他の認知モデルをとる論者のうちにもおおむね認められるものである。

しかし、このモデルは我々の美的鑑賞の実態を記述するという面で、いくらかの問題を有している。もちろん、認知モデルは我々の美的鑑賞を陶冶し、これをより客観的なものにしようとしているのだから、このモデルに対し美的鑑賞の実態を記述するよう求めることはナンセンスだという批判もありうる。しかし、認知モデルが我々の実際の美的鑑賞のあり方から乖離してしまい、極端な場合ほとんどの人がそのような鑑賞を行うことができないという事態に陥るとすれば、このモデルの持つ客観性も無意味なものに終わるだろう。ゆえに、認知モデルの議論を検討することでその問題点を指摘することが、本稿の目的となる。本稿で得られる成果は、のちに〈制限的認知モデル〉を構築する際の足掛かりとなる。

まず、第1節では、自然の美的鑑賞におけるカテゴリーに関する問題を挙げる。ケンダル・ウォルトンは、芸術に関する正しい美的判断とは、正しいカテゴリーのもとで知覚することで達成されると主張した。カールソンはこれを自然へと援用し、自然の場合も正しいカテゴリーのもとで知覚すれば適切な美的判断が可能であるとした。その正しいカテゴリーとは、常識的／科学的知識によって明らかになるカテゴリー(分類)である(以下、これを「常識的／科学的カテゴリー」と呼ぶ)。しかし、仮にこの主張が正しいとした場合、第一に、誤った常識的／科学的カテゴリーのもとで知覚した場合の美的判断は常に誤りなのかという問題が残る。第二に、自然物は同時に複数の常識的／科学的カテゴリーに属しうるが、どこまで子細なカテゴリーを知る必要があるのか、という問題も残る。この二つの問題はともに、自然の美的鑑賞における常識的／科学的カテゴリーの正しさをゆるがす。

第2節では、美的鑑賞の対象に関わる困難について論じる。認知モデルは科

学的知識(典型的には生態学的知識)によって明らかになる自然の秩序に注目するが、それは美的鑑賞の対象を生態系全体とすることにつながりかねないという問題である。たとえそれを避けて美的鑑賞の対象を眼前の個々の事物あるいは風景に限定したとしても、その際に美的なものが眼前にある事物であるのか、あるいはそれが属する秩序であるのかという問題が残ってしまうのである。

第3節では、認知モデルに対して先行研究が行ったいくつかの批判に、以上の問題がいかに現れているかを確認する。そしてそれに再反論する形で、本稿ののちになされる課題として<制限的認知モデル>の構築の可能性を示唆し、認知モデルそのものを棄却する必要はないと結論する。

1. 美的鑑賞における正しいカテゴリーに関する問題

1. 1. 誤ったカテゴリーに基づく美的鑑賞

カールソンは、ケンダル・ウォルトンのカテゴリー論⁹を自然の美的鑑賞理論として援用した。その際に強調されたのは、自然物を正しい常識的／科学的カテゴリーのもとで知覚するとき、我々は当の対象について正しい美的判断を下すことができるということである。カールソンがカテゴリーの正しさによって美的鑑賞および判断の正しさを保証するのであれば、当然カテゴリーの誤りは誤った美的判断を導くということになる。彼は常識的／科学的カテゴリーとそれに伴う美的判断の誤りについていくらかの例を挙げているが、それらは二つに分類することができる。一つは、自然物を人工物と誤る場合であり、もう一つは、ある自然物を別の自然物と誤る場合である。第一の場合については、比較的容易に考えることができる。すなわち、自然物を人工物として、あるいは人工物を自然物として鑑賞するということは、対象が持つ出自から明らかになる美的質を見落とすという点で美的欠落(aesthetic omission)¹⁰であるし、また対象が持ち得ない美的質をそのうちに見出すという点から美的詐欺(aesthetic deception)¹¹であると言えるからである¹²。

しかし、自然のカテゴリー間での誤りは、認知モデルにとってより本質的な問題となるだろう。「ナガスクジラは優美で、雄大な哺乳類である。だが、もし

も魚類として知覚されたとしたら、ナガスクジラはより見苦しく、いくぶんまぬけで、もしかしたら少し不格好にさえ見えるだろう(おそらくややウバザメのように見えるだろう)。(The rorqual whale is a graceful and majestic mammal. However, were it to be perceived as a fish, it would appear more lumbering, somewhat oafish, perhaps even a bit clumsy (may be somewhat like the basking shark.))¹³ と言うことでカールソンが指摘しているのは、ナガスクジラが「哺乳類」であるのにも関わらず、「魚類」として知覚された場合に起こる美的判断の変化である。つまり、ナガスクジラは「魚類」として鑑賞されているときもなお自然物として見られているのだが、誤ったカテゴリーのもとで鑑賞されることで、正しいカテゴリーの下で鑑賞された場合に比べて、美的に劣ったものとして見られるというのである。だが、クジラを魚と間違えたとはいえ、この場合のクジラに対する美的判断が、彼が言うほどに劇的な変化を遂げるということは、果たして言えるのだろうか。自然物と人工物とでは、対象が形成された過程がまるで異なっているために、美的判断が根本的に異なることもありうる。しかし、このナガスクジラの例の場合には、「哺乳類」も「魚類」も同じく自然過程による所産であるため、同じ論理を用いて、カテゴリーの誤りが美的判断の誤りにつながると帰結することはできない。

上述のクジラの場合には、カールソンが主張するほどに美的判断が変容するかは不明であるにせよ、クジラが魚類ではなく哺乳類であるということが常識として受け入れられている以上、クジラを「魚類」として美的に鑑賞することは誤りであると言いうるかもしれない。だが、常識の範囲ではなかなか見分けられない自然のカテゴリー同士のあいだで起こる取り違えについては、どう考えればよいのだろうか。たとえば、マルコム・バッドは、次のように述べている。

もしあなたが誤知覚を通して、[実際にはそうではないのに]ある物を自然種 K の実在として誤って経験したならば、そのときはもちろん、あなたのそれ[ある物]に関する美的鑑賞は誤りに基づいている。しかし、ある物がある自然種の実在として誤って経験することは、以下の場合にはどんな美的重要性も持たない。第一に、知覚において何の誤りもない場合である。そして第二に、誤りが単に名前を間違えた程度のことである場合である。

If you mis-experience an item as being of natural kind K through misperception, then of course your aesthetic appreciation of it is mal-founded. But to mis-experience an item as being of a certain natural kind is not of any aesthetic significance if, first, there's no error in perception, and, second, the mistake is merely a matter of getting the *name* wrong....¹⁴

バッドは続けて、たとえば実際にはバイモ(ユリ科の植物)である花を、完全に誤って「ラン」として知覚したとしても、もし名前の違い以上に「バイモ」と「ラン」を区別するような知識を持たないのであれば(すなわち両方とも花であるという程度のことしか分かっていないのであれば)、知覚には変化を及ぼさないため、美的鑑賞も変化しないと言う。つまり、彼によれば、知覚に影響を及ぼさない程度のカテゴリーの誤りは美的鑑賞にとって問題ではない。この主張は、我々の日常における実践を振り返ったとき、おおむね正しいと考えられうる。道端の花を見るとき、その名を取り違えて理解していて、後でその事実を知ったとしても、それでもなおその花に対する美的判断を変更しないということは十分ある。さらに言えば、その花を「花」として鑑賞している時点で、一定程度の正しさを持った美的判断を下していると言っているのである。

このように考えると、カールソンによるカテゴリー論の導入に関して、正しい常識的／科学的カテゴリーに基づく美的判断は常に正しいということが仮に言い得たとしても、誤ったカテゴリーに基づく美的判断は常に誤りであるということは保証されていない。誤ったカテゴリーもまた正しいカテゴリーと同じ美的判断を導きうるのであれば、正しい常識的／科学的カテゴリーの持つ正しさの地位は揺らぐ。

1. 2. 常識的／科学的テゴリーの子細さと適切な美的鑑賞の関係

カールソンは、常識的知識に基づくカテゴリーの延長上に科学的知識に基づくより子細なカテゴリーを位置づけ、後者は前者に比べて美的鑑賞および美的判断の適切さを高めるはたらきを持つと主張している¹⁵。たとえば先のバッドの例に倣うならば、ランを「花」として鑑賞するよりも、「ラン」として鑑賞する

ほうが美的判断の適切さが上がるということである。しかし、ランは「花」でもあり「ラン」でもある。ゆえに、ランを「花」として鑑賞したとしても、前項で問題にしたようなカテゴリーの誤りは起きていない。ここでは、より正確な科学的カテゴリーほど、自然の美的判断を適切にするのか否か、ということが問われているのである。もしより正確な正しいカテゴリーを知るたびに我々がさらに適切な美的判断をすることができるようになるというならば、どの時点で我々の鑑賞が客観性を獲得するのかが不明確になる。つまり、客観性の高い自然の美的鑑賞を目指す認知モデルにとって、正確な科学的カテゴリーほど適切な美的鑑賞および判断を可能にすると主張することは、むしろ障害となりうるのである。

この問題に対する一つの応答として考えられるのが、パトリア・マッシュューズのカテゴリーをめぐる主張である¹⁶。彼女はウォルトンに立ち返ることで、自然の美的鑑賞におけるカテゴリーを、「知覚的基準(perceptual norm)」を与えるものとして規定する。彼女は、クジラを「魚類」という誤ったカテゴリーの下で知覚した際の美的影響について、「この場合、クジラと魚類の両方に対する知覚的基準が同じであったか、あるいは海洋生物という、より概略的な根拠に基づいて知覚的基準が判断されたと思われ、ゆえにクジラはどちらの概念に基づいても、雄大に見える。(In this case, it may be that perceptual norms for both whales and fish are similar, or are judged on the more general basis of sea life, and the creature appears grand on either conception.)」¹⁷と主張する。ここでは、彼女の主張の後半部分により注目すべきである。クジラも魚も「海洋生物」という比較的大まかなカテゴリーに包摂され、ゆえに両者に対する知覚的基準が同一であると言えるならば、より正確なカテゴリーが美的判断をより適切にすることにはならないのである。しかも、クジラは実際に海洋生物なのだから、「海洋生物」というカテゴリー下で知覚されることに何ら誤りはない。

マッシュューズの知覚的基準は示唆に富んでいるが、だが一方で彼女は、「追加された知識はただ対象についてより豊かな美的鑑賞を与えるだけではなく、より正確な鑑賞を与える。なぜなら、後者の鑑賞は、より正確な知覚的基準に基づいているからである。(Additional knowledge provides not only for a richer aesthetic appreciation of the object, but also a more accurate one, because it is based

on more accurate perceptual norms.)」¹⁸、すなわち知識が増えれば知覚的基準もより正確になるとも主張している。このように言うとき、たとえ彼女が例外を認めていたとしても、彼女の主張の本質的な部分はカールソンと同じ問題を抱えていると言えるだろう。

つまり、カテゴリーに関する問題点の二つ目として、認知モデル論者の主張通り、より正確な常識的／科学的カテゴリーがより適切な美的鑑賞および判断を導くとは言えないということが挙げられる。1.1.で提起した問題点と同じく、これもまた、常識的／科学的カテゴリーが美的鑑賞において正しいカテゴリーであるという前提を脅かすものである。ゆえに、本節での議論をまとめるならば、自然の美的鑑賞において、常識的／科学的カテゴリーが何らかの形で機能するとは言えても、これが正しいカテゴリーであるという保証はないのである。

2. 生態学的知識による鑑賞の対象

2. 1. 鑑賞対象となる範囲

まず、認知モデルが抱える美的鑑賞の対象に関する問題のうち、鑑賞対象となる範囲をめぐる問題について検討する。認知モデルが生態学的知識を重視することは、鑑賞者の目の前の事物を越え、生態系全体を美的鑑賞の対象とすることにつながりかねない。この問題が顕著にあらわれるのが、ホルムズ・ロルストンの論である。ロルストンは環境倫理学者であるが、倫理的義務と美との関係について多く論じ、両者を架橋する客観性を保証するものとして、科学的知識を挙げている¹⁹。ゆえに彼もまた認知モデルの論者として扱って差し支えない。

ロルストンは、インパラを例にとりて、自然の事物の持つ美的特性について論じる。彼は、我々がインパラの跳躍を優美なものとして鑑賞するさい、その美は生存への「闘争」と結び付いていると主張する。生存することは自然界において非常に困難なことであるため、その生存という理想を目指す闘争の中には、「美的生命力(aesthetic vitality)」²⁰があるというのである。

さらに、彼のいう生存とは、最終的にはインパラという個体あるいは種その

ものではなく、生態系全体に帰されるものである²¹。つまり、先のインパラの優美さは、一見するとインパラが単体で持ち得るものであるが、実際は生態系全体の中でインパラが担う役割に照らすことではじめて、インパラが持ち得る美的特性ということになる。また、ロルストンは事物が生態系との関係性のうちにおいてはじめて美的特性を持つということとどまらず、美的判断そのものの帰属先を生態系全体とする。このことは、ウジのわいたへラジカのような、一見すると美的に否定的と捉えられる事物の美的鑑賞について語られるとき、あらわになる。

すべての個物は枠取られた孤立のうちに見てはならず、その環境によって枠取られるべきである。次に、この枠組みはさらにそれ自体、より大きな状況の部分となる。この状況は、「枠組み」ではなくドラマチックな演劇である。瞬間的な醜さは、ただ進行している動く状況の中で撮られた、静止した一場面にすぎないのである。

Every item must be seen not in framed isolation but framed by its environment, and this frame in turn becomes part of the bigger picture we have to appreciate — not a “frame” but a dramatic play. The momentary ugliness is only a still shot in an ongoing motion picture.²²

上の引用からわかるのは、あくまで個々の事物は生態系の一部分として位置付けられ、鑑賞対象はその部分を含む生態系全体であるということである。ロルストンは、こうした見方を可能にするのは「生態学的観点(ecosystemic prospect)」²³であると説明していて、この内実は生態学的知識と一致している。

だが、このとき生態系とされるものの範囲は規定されていない。ある一つの生態系があると言えるとして、それはその他の生態系と関係し合い、より大きな生態系を構成する部分となり、最終的には地球全体まで拡張しうる。そして、そうした生態系が美的判断の帰属先であるというならば、インパラの優美な跳躍も、ウジのわいたへラジカの死骸も、常に動いている生態系の静止した一場面として、つまり全体に寄与する部分として、等しく美的な重要性を持つものとなる。自然の美的鑑賞に際してはこのような鑑賞のあり方をすべきだと主張

されたとしても、実際に美的な鑑賞対象を生態系だと考えること、そして生態系を基準としてどのような自然も美的に等しいと考えることには、困難が伴うだろう。なぜなら、こうした見方は、我々の通常の美的な知覚とのあいだに大きな齟齬をきたすからである。

以上のことを整理すると、ロルストンの論に依拠すれば、美的判断の帰属先が生態系となり、また当の生態系は地球全体にまで拡張可能であるという問題を抱えることになる。こうしたロルストンの論の危うさを批判したうえで、サイトウ・ユリコは、個々の事物を知覚するという側面に重きを置く²⁴。一見すると、サイトウのように個々の事物の知覚を強調することで、生態学的知識に依拠する際の美的対象に関する困難は乗り越えられるかのように思われる。つまり、個々の事物(あるいは風景)は生態系における役割を表現し、それが知覚されるということで、ロルストンのように生態系全体に美的価値を帰する態度から距離をとることができる。そこで、以下ではサイトウの論および類似するカールソンの論を確認することで、彼らの論が本当に美的対象に関する問題を解決できているのかを検討する。結論を先に述べるならば、彼らの論に依拠すれば、ロルストンとは違った新たな問題が浮かび上がるだろう。それは、自然の美的鑑賞において、美的とされるのは個々の事物や風景なのか、あるいはそれらをめぐる秩序なのか、という問題である。

2. 2. 美的対象の同定

上述したように、サイトウ²⁵はロルストンのヘラジカに関する記述について検討し、彼の論では美的対象が生態系全体、ひいては地球全体にまで拡大しうることを批判する。そこでサイトウは、生態学的知識をあくまで美的対象としての事物や風景の知覚に影響を与えるものとして位置付け、「死骸とウジの知覚によって誘発される生態系全体のはたらきについての概念的な理解は、近くにあるこれら個々の対象に戻されねばならない。(Our conceptual understanding of the working of the whole ecosystem triggered by our perception of the carcass and maggots has to be brought back to these individual objects at hand.)」²⁶と主張する。つまり、サイトウは個々の事物あるいは風景を知覚する際に、対象に関する生

態学的知識が役立てられると考え、美的鑑賞の対象はあくまで鑑賞者の前にある限りのものと考えている。ロルストンに比して、サイトウの論は我々の美的鑑賞と知覚との関係をより理解可能な形で提示していると言えるだろう。だが一方で、サイトウは「自然のあらゆる部分は、物語を語る能力の点で美的に積極的である。(every part of nature is aesthetically positive for its storytelling power.)」²⁷とも述べている。ここで言われる物語とは科学的物語のことであり、さらに生態系全体のはたらきに関する概念的な理解であると言える。先のヘラジカの死骸は「生命循環のドラマ(the drama of the life cycle)」²⁸を語り、ウジの動きは「その光景の裏にある魅力がないが、しかし重要なはたらきを行う一団(the unglamorous, yet crucial work crew behind the scene)」²⁹を象徴するとサイトウは言う。だが、こうした物語を語る能力をあらゆる自然の部分が等しく持つからと言って、それらの対象それ自身が「美的に積極的」とされることには、困難が伴う。確かに、科学的物語によって我々の美的鑑賞が高められる場合があるということは、経験的に認めることができる。だが、対象が語る科学的物語が我々にとって積極的なものとして認められても、ゆえにこの対象の感覚的特性が美的に積極的なものとされるということは必ずしも導かれぬ。つまり、科学的物語に対する価値判断と、その物語に含みこまれる個々の事物に対する価値判断とは、独立に遂行される場合があるということである。もしもサイトウの主張に依拠してすべての自然が科学的物語を語る点で美的に積極的であるというならば、実際にはこのとき美的とされるものが、個々の事物となる場合と、それが語る物語そのものに留まる場合とが含まれていると考えられるだろう。

このサイトウの論は、カールソンのいう「秩序に基づく鑑賞(order appreciation)」³⁰の影響を受けている³¹。カールソンのいう秩序に基づく鑑賞とは、鑑賞者自身が周囲のものの中から対象を選択し、その対象を生み出した諸力が対象に課している秩序に焦点を当てるような鑑賞のあり方である。さらに、この対象の選択には、対象をとりまく秩序を可視化し、理解可能にする助けとなる物語が参照される。この鑑賞においては、秩序、それを生み出す諸力、そして秩序を明らかにする説明のそれぞれと、これらのあいだでの相互作用への気づきと理解が、鑑賞における適切な位相化を指し、鑑賞反応を導くのである³²。さらにカールソンは、自然の鑑賞の場合には、「秩序」は「自然の秩序」、

「諸力」は「地理学的・生物学的・気象学的諸力」であり、さらに、これらに与えられる適切な説明とは、「自然科学によって与えられる物語」であるとカールソンは主張する。さらに、彼によれば、すべての自然は必然的に自然的秩序を明らかにする。この意味で、「すべての自然は等しく鑑賞可能であり、それゆえに自然界が与えるすべてのもののあいだでは、選択するということが究極的な重要性を多くは持たない。(all nature is equally appreciable and therefore selection among all that the natural world offers is not of much ultimate importance.)」³³と彼は言う。つまり、すべての個々の事物は物語によって秩序の一部として位置付けられているため、その意味で等しく鑑賞に値する。ゆえに、どの部分を選択し、焦点を当てるのかということは、本質的には重要なことではないとカールソンは主張する。物語そのものは非美的であるが、「別の意味では非常に美的である。(in another sense they are exceedingly aesthetic)」³⁴。なぜなら、物語は自然を秩序立てて、それらに「意味(meaning)」や「重要性(significance)」、「美(beauty)」、というような質を与えるからである³⁵。そして、この質をカールソンは美的質であると主張するのである。要するに、「秩序に基づく鑑賞において役割を担う物語は、自然物すべてを等しく美的に魅力を持つようにみえさせることへ向かって作用する。(the stories that play a role in the order appreciation of nature work toward making natural objects all seem equally aesthetically appealing.³⁶)」のである。この主張は、「すべての手つかずの自然は(中略)本質的に美的によい。(All virgin nature ... is essentially aesthetically good.)」³⁷という、カールソンによる積極美学のテーゼと密接に関わっている。確かにここで、彼が美的対象としているのはあくまで個々の事物であって、秩序ではないと考えられる。しかし、個々の事物は秩序の一部であることによって等しく美的な魅力を持つというならば、最終的に個々の事物とその関係性の集積である秩序もまた、美的なものになりうる。むしろ、秩序が美的であってはじめて、個々の事物はそれとの関係性において美的なものとなると考えられるだろう。

以上のことを考えると、眼前の対象の知覚により一層寄り添うかたちでの美的鑑賞を考えると、認知モデルにおいて美的対象が眼前の事物なのか、あるいはそれが含まれる秩序そのものなのか不明確であるということは、認知モデルの有する問題点の一つと言える。

3. 認知モデルの擁護—〈制限的認知モデル〉の構築へ向けて

第1節、第2節でそれぞれ述べたように、認知モデルには大きく分けて二つの問題が存在していた。だが、認知モデルそのものを棄却するのは早計に過ぎるだろう。なぜなら、認知モデルを否定する論者の主張と比べたとき、「自然を自然として」美的に鑑賞するということを考慮に入れるならば、認知モデルは一定の利点を有しているように思われるからである。

たとえば、常識的／科学のカテゴリーが果たす役割に対するもっとも急進的な批判の一つは、ニック・ザングウィルの形式主義である。彼は、対象があるカテゴリーに属することから導き出される美をカントに倣って附属美、これに対した対象の形式を鑑賞することから感受される美を自由美とし、後者こそが純粋な美であると主張した³⁸。彼によれば、たとえばホッキョクグマの持つ美はそれが「ホッキョクグマ」であることに由来するのではなく、ただ現象として美しい。だから、目の前のホッキョクグマが本物なのか、あるいは着ぐるみを着た人間なのかということは、その美に影響しないと彼は言う³⁹。このように言うとき、「自然を自然として」鑑賞することができず、それによって対象に即した美的鑑賞が困難になってしまう。常識的／科学のカテゴリーを単純に破棄することでは、よりよい自然の美的鑑賞モデルは得られないのである。また、ノエル・キャロルは知識を用いない自然の美的鑑賞モデルとして、自然によって喚起される感情に注目する「喚起モデル(arousal model)」を提唱する。しかし、自然によって心を動かされるという極めて素朴な自然の美的鑑賞のあり方においても、常識的知識は関与している。たとえば、我々が滝の大きさに心動かされる時、それが「滝」だと知っていることで、その大きさに対して正しい比較基準を設定することができている⁴⁰。そして、常識的知識の延長上に科学的知識を位置づけられうる以上、常識的／科学のカテゴリーは美的鑑賞において一定の役割を果たし得ると言える。すなわち、常識的／科学のカテゴリーをめぐる問題は、カテゴリーの適用を単純に放棄するのではなく、これを修正することで解決されるべきである。

次に、秩序に関する問題について、たとえばパッドは岩を例にとってカールソンに反論する⁴¹。岩は創造された環境との関係で考えるならば、自然の諸カ

によって削られてできたものであり、よって削られやすさを表現する。そのため、カールソンは、岩は環境との関係で捉えられたとき、固さという質を表現しなくなると言う⁴²。これに対しパッドは、個々の自然物はそれ単体で持ち得る質があり、これは環境との関係性で持つ質によって打ち消されるものではないと主張する。確かに、岩は環境との関係で捉えられたとしても、固さを表現するだろう。眼前の対照と秩序を切り離すパッドの立場をとれば、美的対象が眼前の事物なのか秩序なのかが不明であるという問題を回避することができるように思われる。しかし、カールソンの言う固さは、岩が「独立した美的統一体 (self-contained aesthetic units)」であるときに持たれる特性である。つまり、岩が自律的な物体であり、外部世界との関係を持たないという理解に基づいているために、この場合の固さの内実は単なる物理的固さとは異なる。ゆえに、パッドの反論は妥当ではない。よって、「秩序による鑑賞」をめぐる困難は、ただ個々の事物を秩序から独立させることで解決されうるものではない。対象が秩序に属するという事は、個々の事物が「自然である」ということの内実を特徴付けているのである。よって、この問題にも適切な修正を施すことで、認知モデルを洗練させることが望ましいだろう。

最後に、それぞれの問題点に対する解決を予示し、本稿を終えたい。

まず、常識的／科学的カテゴリーが自然の美的鑑賞において、本当に正しいカテゴリーであると言えるのかという問題があった。この問題について考えるために、ウォルトンによる芸術のカテゴリー論へと立ち戻る必要がある。ウォルトンの言う正しいカテゴリーとは、ブライアン・レッツによれば〈ある作品の鑑賞に際して、美的に特権的なカテゴリー〉であると解釈される⁴³。カールソンは、ただ常識的／科学的カテゴリーが自然物を分類するうえで事実上正しいという理由で、カテゴリー論を自然へと援用している。この点に留意することで、常識的／科学的カテゴリーが自然の美的鑑賞において果たし得る役割を再考することが、認知モデルに対する修正となるだろう。

次に、秩序に注目することで、美的対象となるのが個々の事物なのか、あるいは秩序なのかという問題があった。この問題を解決する視座を提供するものとして、パトリシア・マッシュューズの論に注目したい。彼女は認知モデルを、秩序が美的対象となる「言語的モデル (linguistic model)」⁴⁴と、個々の事物が美

的対象となる「知覚的モデル(perceptual model)」⁴⁵の二つに下位区分している。「言語的モデル」はただ美的な秩序が個々の事物の美的な知覚には影響を与えていない場合を、「知覚的モデル」は秩序が個々の事物の美的な知覚に影響を与えている場合を説明している。よって、彼女の論を精査することで、秩序が個々の事物の美的鑑賞に影響するのはどのような場合かを同定し、それを認知モデルに対する修正とすることが可能だろう。

これらの修正を施すことで、〈制限的認知モデル〉構築への道を拓くことが可能となる。「制限的」とは、従来の認知モデルよりも我々の美的知覚そのものに依拠するという点で、認知モデルの主張を弱めるということを意味している。本稿は、認知モデルの問題点を明確に示したという点で、この新たなモデル構築の素地を提示したと言えるだろう。

註

1. 認知モデルに対し、知識の役割をあまり重要視しない立場が非認知モデルである。そうした立場を採る論者には、たとえば自然への没入を説くアーノルド・バーリアント (Arnold Berleant)、想像力の観点から自然の美的鑑賞を論じるエミリー・ブレディ (Emily Brady)、感情に注目するノエル・キャロル (Noël Carroll) などが含まれる。
2. ヘプバーンの “Contemporary Aesthetics and the Neglect of Natural Beauty” (in Bernard Williams and Allan Montefiore (eds.), *British Analytical Philosophy*, London: Routledge&Kegan Paul, 1966, pp. 285–310) は、カールソンによって、自然の美学に関する現代の議論における最初の指針であると評価されている (Allen Carlson, *Aesthetics and the Environment: The Appreciation of Nature, Art, and Architecture*, New York: Routledge, 2002, p. 15)。ヘプバーン自身が唱える自然の美的鑑賞モデルは、カールソンによって「形而上学的想像力モデル」と名付けられている。ヘプバーンは知識が自然の美的鑑賞には求められるとしつつも、彼の主張は認知モデルの枠には取まらない。
3. 環境保護論は、生態学と合わさることで環境倫理学を形成している。なお本稿において環境保護論 (environmentalism) という語を用いる際には、実際には保護 (preservation) だけではなく保全 (conservation) も含んでいる。
4. もちろんレオポルドのほかにも、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Threau), ジョン・ミュア (John Muir) といった人物の残した功績も大きい。特に生態学的観点への言及からみれば、ミュアによるネイチャーライティングの著作はそうした視座を多分に含んでいる。(Allen Carlson, *Nature and Landscape: An Introduction to Environmental Aesthetics*, New York: Columbia University Press, 2009, pp. 5–6, 沼田真著, 『自然保護と生態学』, 共立出版, 1973年, 101–102ページ)
5. Aldo Leopold, *A Sand County Almanac with Other Essays on Conservation from Round River*, New York: Oxford University Press, 1949, p. 261.
6. また客観性との関係から、認知モデルはある種の規範的な自然の美的鑑賞のあり方を

提唱しているとも考えられる。我々は「適切な (appropriate)」な美的鑑賞を「すべき」だという主張は、認知モデルの論において繰り返して強調されることである。この規範性については、十分留意する必要があるだろう。

7. カールソンは、科学的知識を、常識的知識の延長上にあるものと考えている。
(Carlson, *Nature and Landscape: An Introduction to Environmental Aesthetics*, p.112)
8. このことを示す箇所は多数あるが、ここでは一つだけ引用を挙げておく。
「芸術を美的に鑑賞するために我々が芸術の伝統と、その伝統のうちの様式に関する知識を持たなければならないならば、自然を美的に鑑賞するために我々は様々な環境に関する知識と、その環境のうちにある体系や要素に関する知識を持たなければならない。」

If to aesthetically appreciate art we must have knowledge of artistic traditions and styles within those traditions, to aesthetically appreciate nature we must have knowledge of the different environments of nature and of the systems and elements within those environments. (Allen Carlson, *Aesthetics of the Environment*, p. 50)

ここで言われる「諸体系や諸要素に関する知識」が、生態学的知識を示していると考えられる。

9. ウォルトンのカテゴリー論とは、ある芸術作品を鑑賞するときに、その作品が属する正しいカテゴリーを知ることで、正しい美的判断を行えるとするものである(Kendall Walton, “Categories of Art,” *The Philosophical Review*, 79:3 (1970): 334–367)。たとえば、ピカソの「ゲルニカ」を鑑賞する際に、それが「キュビズム」というカテゴリーに属する作品だと知っていれば、この絵画が持つブロック状の形象を標準的(standard)な特性として、また色や構図などを「キュビズム」というカテゴリー内で可変的(variable)な特性として知覚することができる。それによって「ゲルニカ」に対する正しい美的判断を行える。また、もし「ゲルニカ」がなめらかな曲線で描かれていたならば、この特性は「キュビズム」というカテゴリーに対して反標準(contra-standard)な特性となり、「ゲルニカ」が「キュビズム」というカテゴリーに属することを脅かす。

10. Carlson, p. 65.

11. Ibid.

12. もちろん、品種改良の問題などを含め、自然物と人工物の境界線が曖昧であるとも言えるため、自然物と人工物とのあいだのカテゴリーの誤りもまた、このように単純に割り切ることができる問題ではないとも考えられる。ただし、本稿においてより問題となるのは自然物間でのカテゴリーの誤りの場合であるため、ここではこれ以上立ち入ることはしない。

13. Ibid., p. 8.

14. Malcolm Budd, *The Aesthetic Appreciation of Nature: Essays on the Aesthetics of Nature*, Oxford: Clarendon Press, 2002, p. 23.

15. Carlson, *Nature and Landscape*, pp. 111–113.

16. Patricia Matthews, “Scientific Knowledge and the Aesthetic Appreciation of Nature,” in Allen Carlson and Sheila Lintott (eds.), *Nature, Aesthetics and Environmentalism: From Beauty to Duty*, New York: Columbia University Press, 2008, pp. 188–204. (初出 2002 年)

17. Ibid., p. 197.

18. Ibid., p. 195.

19. Holmes Rolston, “Does Aesthetic Appreciation of Landscapes Need to be Science-Based?,” in *British Journal of Aesthetics*, 35: 4 (1995): 374–386 には、この傾向が顕著に現れている。

20. Rolston, “From Beauty to Duty: Aesthetics of Nature and Environmental Ethics,” in Arnold Berleant (ed.), *Environment and the Art*, Burlington: Ashgate Publishing Company, 2005, p.

134.

21. ロルストンは、以下のように述べている。
「生存するものとは決して単なる個体や種ではなく、それらを含むシステムなのである。それぞれ[個体や種]は他のものと対立するが、しかし価値のそれぞれの中樞は結び合わされて、一つの協働となっている。この協働において、諸価値は交換されるときでさえ保たれている。この観点から我々は、ある生命の流れから別の生命の流れへの資源の変換—生態系を編む生命の糸の吻合—を見るのである。」
What survive is never mere individuals or species, but the system containing them. Each is against the others, but each locus of value is tied into a corporation where values are preserved even as they exchanged. From that point of view, we see conversions of resources from one life stream to another — the anastomosing of life threads which weaves an ecosystem. (Rolston, “Values Gone Wild”, in *Inquiry*, 26: 2 (1983): 195)
22. Rolston, *Environmental Ethics: Duties to and Values in the Natural World*, Philadelphia: Temple University Press, 1988, p. 239.
23. Ibid.
24. Yuriko Saito, “The Aesthetics of Unscenic Nature”, in *Nature, Aesthetics and the Environmentalism: From Beauty to Duty*, pp. 242–243. (初出 1998 年)
25. サイトウもまた認知モデルを支持する論者ではあるが、カールソンとサイトウの主張には重要な差異が 2 点ある。一つは、カールソンが「真である美的判断を下す」こと、すなわち認知的な動機を自身の論のうちで前面に押し出しているのに対し、サイトウはそういった真なる美的判断をする必要性を支えるものとして、道徳的側面を強調することである。もう一つは、サイトウが正しい美的鑑賞に寄与する知識として、民話や神話といった土着のものに関する知識をも科学的知識と同等に評価する点である。(Saito, “Appreciating Nature on its own Terms”, in *Nature, Aesthetics and Environmentalism*, p. 156 初出 1998 年)
26. Saito, “The Aesthetics of Unscenic Nature”, pp. 242–243
27. Ibid., p. 244.
28. Ibid., p. 243.
29. Ibid.
30. カールソンは、秩序に基づく鑑賞に対するものとして「デザインに基づく鑑賞 (design appreciation)」があるとする。意図に基づく鑑賞は、伝統的な芸術作品のように、主に作者によるデザインに基づくことで行われる対象の鑑賞のことである。一方、秩序に基づく鑑賞は、デザインに基づいて生成されたわけではない対象に対して行われる鑑賞である。自然の事物に限らず、ジャクソン・ポロック (Jackson Pollock) のアクション・ペインティングや、シュルレアリストの自動筆記による作品のような作品に対しても、この秩序に基づく鑑賞が適しているだろうとカールソンは主張する。(Carlson, *Aesthetics and the Environment*, pp. 102–125)
31. Saito, “The Aesthetics of Unscenic Nature”, p. 244.
32. Carlson, *Aesthetics and the Environment*, p. 118.
33. Ibid., p. 120.
34. Ibid., p. 121.
35. Ibid.
36. Ibid.
37. Ibid., p. 72.
38. Nick Zangwill, *The Metaphysics of Beauty*, Ithaca: Cornell University Press, 2001, p.60.
39. Zangwill, “Formal Natural Beauty,” in *Proceedings of Aristotelian Society*, New Series, 101

(2001): 212.

⁴⁰ Noël Carroll, “On Being Moved by Nature: Between Religion and Natural History,” in *Nature, Aesthetics and Environmentalism*, 2008, p. 180. (初出 1993 年)

⁴¹ Budd, pp. 132–133.

⁴² Carlson, *Aesthetics and the Environment*, p. 44.

⁴³ Brian Laetz, “Kendall Walton’s ‘Categories of Art’: A Critical Commentary,” in *British Journal of Aesthetics*, 50:3 (2010): 287–306. なお、左記の論部はレッツの死後、査読員のコメントに基づき、ドミニク・マクルバー・ロベスによって改訂・編集されたものである。

⁴⁴ Matthews, p. 191.

⁴⁵ Ibid.